The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高市黒人 : 特に第三句目の地名表現について
Author(s)	犬養, 孝
Citation	語文. 1953, 9, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高市黒人

――特に第三句目の地名表現について――

犬養孝

一

万葉集中の所謂著名作家の中で、地名を歌中にとり入れることの最も多いものは、比率の上からいつて、高市黒人の総歌数十八首中地名三十九、春日老の八首中地名十二の両者をもつて、その最多とする。黒人の歌は全部短歌のみで、十八首の中には、作者について疑問のあるものが五首（巻一・三二・三三、巻三・三〇五、巻九・一七一八、巻十七・四〇一六）あるが、これ等はいづれも従来黒人の歌と考へられてゐるものであつて、今、通説に従つてこの五首を含めて考察する。尚、万葉諸作家の地名の概観については、簡単ながら創元社の万葉集講座（第三巻、万葉地理考（その時代性・作家性））に述べたことがあるので参照していたゞければ幸甚である。

黒人の歌が、数少い歌の中に於いて、地名をかくも多数とり入れてゐることは、単に異色であるばかりでなく、また黒人が旅の歌人であるからといふばかりでなく、必ずや、地名を歌中に表出することによつて、黒人独特の心情の表出をはかるものと見なければならない。黒人の地名表現の考察は、黒人理解の大きな鍵でなければならない。黒人の歌全部の地名表現は時を改めて述べるとして、ここでは、黒人の地名表現中、最も異色あり、最も注目すべき、短歌第三句目に於ける地名の表出を考察の対象とする。

一般に、万葉集の短歌に於ける地名の、一首中に於いて占める位置は、第一句に最も多く、以下順次少くなつて、第五句が最も少くなつてゐる。万葉集全体の短歌（異伝の歌すべてを含めて）中の地名総計は一八一〇箇、その内訳は、左記の如くである。

第一句（六七〇）、第二句（五三〇）、第三句（二八七）、
第四句（二五六）、第五句（六七）

個々の作家又は集団については、多少の異同はあつても、概ねは此の順位にあるといつてよい。然るに黒人の場合は

第三句（一一）、第四句（八）、第一句（六）、第二句（四）、
第五句（〇）

の順位で、地名は、第三句が、彼の少い歌数の中で、特に顕著に多くなつてゐる。これは、他の著名歌人にあつても、また作者未詳の巻々、或は短歌集団（古歌集等）にあつても、他にその例を見ない処であつて、黒人のみの異色とする処である。ここに特に、黒人短歌の第三句目の地名表現をかへりみて、その心情表出の在り方を考

察する所以である。

二

黒人の短歌は、大部分、第二句で切れるか、又は句切がなくても声調上そこに若干の休止を考ふべきものが多く、十八首中十四首を数へる。この場合多くは、二句までに、黒人、独特の主観又は行動等が述べられ、第三句目に地名の表出となるのである。

(1) いにしへの　ひとにわれあれや　楽浪の　故き京を　みれば
かなしき　（巻一―三二）

(2) いづくにか　われはやどらむ　高島の　勝野の原に　このひ
くれなば　（巻三―二七五）

(3) いももわれも　一つなれかも　三河なる　二見の道ゆ　わか
れかねつる　（巻三―二七六）

右の三首いづれも二句目に休止又は若干の小休止がある。尙、(1)の歌の初二句「古人、爾和礼有哉」は諸訓があつて今に定まらないが、代匠記精撰本の一訓、近くは新校の訓に従ふ。二句までの処は、(1)の歌では、世の常識を隔絶して、実在の背後にしみとほるいぶかしみ内省された主観が、5音・3音・5音（この5音は更に2・2・1）の律調に乗つて深められ、古にあこがれ共感しゆく形となつて、一音多いことがそれだけ心情を極点の「や」にせりあげ、そこに次への転換の契機を孕ませて休止する。(2)の歌では、旅する自己の心細さ・不安感が見つめられ、二句目の3音・4音の律調に乗つて、調高く詠歎され、思ひをあとにのこして休止となる。(3)の歌では、自己と〃妹〃との間の省察から来る詠歎が、「妹も」「我も」のつみかさね、3音・4音の発展、O音の韻の助けを得て、これまた、主観はせり上げられた処で、休止する。(1)(2)(3)いづれも調は高く、想は深くあくまで静かである。黒人の場合、まづ何よりもかうした主観の表出を初二句に試みないではゐられないところ、一つの心情表出の型と言へよう。しかも、頼りどころのないこの主観は、(1)(2)(3)いづれにも見られた次へ伸びようとする潜勢力を孕んで、休止の前に身構へし、何らか頼りどころを求める心情の姿勢である。地名が第三句目に実に鮮かな印象を以つて登場する所以は、ここにあるものであらう。しかも現はれた地名は、下句の心情表出を全からしめるのみならず、初二句にかへつて、一首全体の心情表現を全からしめる趣である。

即ち、(1)の歌では、思ひ出と追慕と悲傷の伴つた地名「ささなみ」が登場して、主観をここに躍るやうに定着し、定着すると共に主観は背後にかくれて、具体的な焦点の所、「ふるき京を（3音・4音）」へと、初二句の律動に応じて、心情は具象の場所に沿うて流れ、表は現実の土地を表出してゐながら、古代にあこがれ、古代に深まる作者の心のありどころを潜ませ、遂に両者はなひあはされて結句の「みればかなしき（3音・4音）」に融合結実する。しかも結句が初二句の極点「や」に呼応するのみならず、四・五句の3・4音の律動を得て、悲傷を尽きないものにする。結句だけをとらへれば単純な主観句にすぎないものが生動するのも、表現構造のこの必然性によると云へよう。

(2)の歌の場合も、第三句目の地名「高島」（琵琶湖西岸）を得て、以下、心情の定着し具象化されてゆく点は似てゐるが、その過程は異なり、「高島の（5音）勝野の（4音）原に（3音）」と大地名から小地名へ、「の」音の律動、及び5・4・3音の調によつて、焦

点化され、そのことが広漠とした原野の感と漠とした不安感を一点にしぼつてゆき、結句の日没時の仮想の中に両者は融合結実する。四五句の4・3・3・4音の律動は、心細い原野の中にはいつていつて更に不安の歎きに発展する心情の呼吸に合し、恰も暮色に追はれるが如き寂寥焦燥の感となつて、初二句に呼応する。(3)の歌の場合は、大地名から小地名への呼吸、結句の工合等大要は(2)の歌と似た構造であるが、彼の地名への興味と数字の興を表に、初二句の省察の因由をたどる呼吸で、地名はその点から表出され、初二句の主観に対応する必然性に乏しい感はあるが、さうした地名の表出法に却つて、淡々と流動する愛情も表出されてくる。

右の三例の場合は、初二句に地名を含まぬ主観句を以つてして、二句目に休止を持ち、その休止をついで、三句目冒頭に一首の主題地たる大地名を躍出せしめ、以下四句目に小地名を続けて土地の焦点化をはかり、主観は地名のこの表出法に添うて発展具体化され、結句に主客融合の詠歎を見る方法である。もつとも(1)の歌の「ふるき京」だけは地名ではないが、表出法の上からは、地名に準じた一つの場所と考へてよいところである。

妹が家も　継ぎて見ましを　大和なる　大島の嶺に　家もあらまし　（巻二―九一）

の如く、初二句が地名を含まぬ主観句ではあつても、助詞「を」を伴ふ例は、次の考察の必要上これを除外して、万葉集短歌全体の中から初二句に地名を含まぬ主観句、二句目休止、三句四句に大小地名の連接による表出法のものを調査して見ると、たとへば

王の　親魂合へや、豊国の　鏡の山を　宮と定むる（巻三―四一七）
零る雪は　あはにな降りそ、吉隠の　猪養の岡の　寒からまくに（巻二―二〇三）

の如き例は、黒人の三例を別にして総数十二例を数へる。いづれも万葉中期以前に散在してゐて末期にはなく、個人として特色とする例も見出せず、この心情表出の方法は、黒人の個性的特色をなすものといへよう。

三

前項と略〻似た趣の表出法で、二句目に助詞「を」を伴ふものに、黒人には

(4)　とぐきても　みてましものを　山背の　高のつきむら　ちりにけるかも　（巻三―二七七）
(5)　かくゆゑに　みじといふものを　楽浪の　旧き京を　みせつつもとな　（巻三―三〇五）

の二首があり、二首ともに初二句に主観句を以つてし、二句目に声調上の休止を認むべきものである。

(4)の歌の場合の初二句は、下句の淡々たる自然の景を奥深く或は愛深くとらへる処から来る詠歎であつて、そこに既に黒人の特色は現はれ、主観をさきに打出す事によつて一首に躍動感を与へ、のみならず一・二句の「も」「ものを」のO音の脚韻の効果と、5・4・3音の律動によつて、無念さは極まりこもつて休止となる。殊に二句目が3・4音の場合には思ひはさきに伸びるけれども、この場合の如く4・3音となると、思ひはこもつて屈折して憧憬よりも自己の心に向けられた悩みとなり、それが却つて次句への弾力を孕んで休止の前に身構へする姿勢となる。これは、(5)の歌の場合の二句目が一音多く、5・3音となつてゐる場合も同様である。(5)の場合

の初二句も、近江旧都の地に寄せる作者の思慕と回顧の気持を奥深く省察する事により一層歎きを深める心情で、「理になづむ」といふ批評（私注・全注釈等）もあるが、これを一音多い声調と併せ見る時、結句の「見せつつ」と応じて「見じ」も生き、却つて、表面的ではない作者の精神の深さに於いて身もだえする如き律調となつて、次句へ発展する弾力を孕むものとなる。

かくてこの弾力は、(4)(5)の歌共に主観の定着点を求めて、第三句目の地名表出を極めて顕著に効果的にし、地名が躍り出るやうな鮮かさで表出される。それが(4)の歌の場合では、「山城の」（5音）が、自国ではない他国の新鮮な珍しさに於いて登場し、四句目の「高の槻群」（3・4音）（高は、山城の綴喜郡多賀郷、生田耕一氏説）と続いて、大地名より小地名への音の効果を得て焦点化され、そのことがまた段々に見上げゆく心、段々に恨めしく惜しむ心に拍車をかけて、結句「散りにけるかも」（3・4音）の詠歎を必然的なものにする。の音のつみかさねは初二句のO音の脚韻に響き更に結句のOの脚韻に応じて、重い心残りの感じに効果を与へ、結句の3・4音は無念さの歎きを無限に発展せしめて、初二句に響き返るのみならず、四・五句の3・4・3・4音の律動は無念さと共にその風趣への愛着の餘韻を醸出する。(5)の歌の三・四句、「楽浪の」（5音）「旧き都を」（3・4音）の場合も、主題は異なつても、その哀韻の表出され方は、略〻(4)と同様で、結句（「みせつつもとな」）は4・3音となつて(4)の場合と異なり、詠歎は内面的に凝結しゆく餘韻となつて、初二句の詠歎に深く響きあふものとなつてゐる。(4)(5)の歌とも、四・五句に具体の地を提示して描写を持たないが、作者のこまかい心情の動きは、その表現方法の中に刻まれていつてゐて、描写以上の効果を挙げてゐる。

万葉集短歌中、初二句に地名を含まぬ主観句を置き、二句目の終りを助詞「を」以つてし、三句目冒頭に地名を置く表出法のものは、この黒人の歌二例を別にして、集中に総数九首を数へ、いづれも散在の形である。その中、黒人の場合の如く、三・四句に地名を置くものは、前に記した「妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを（巻二―九一）」の一首のみである。従つてこの(4)(5)の歌の如き表現法は黒人の最も個性的な表現方法である。殊にこれを二の項に述べた(1)(2)(3)の歌の表現方法と思ひあはせ見る時、彼の数少い十八首の歌の中で、五首のこの心情の表出法を見る事は、他の作家に比類ない特色と言へよう。単に地名への関心のみならず、地名表現に異常なる情熱の看取できることは、第三句目の地名表現のみについても、更に各種の表出を行つてゐるのである。

四

短歌第三句目に、地名のあとにつづく助詞又は「なる」等の語を伴はないで、地名のみが置かれる歌は集中に数多く見られるが、これを、初二句に地名を含まず、二句目が句切になり、四・五句にも地名を含まぬもの、たとへば

苦しくも　晩れゆく日かも、吉野川　清き河原を　見れど飽かなくに
（巻九―一七二一）

命をし　幸くもがも、名欲山　石ふみ平し　またまたも来む
（巻九―一七七九）

の如きに限定すれば、二十例を数へる。この二十例の初二句を見ると、量の多少はあれ、いづれも主観的叙述をなして居り、地名のあとの四・五句は、次の三例を徐いて、四・五句の両者か、又はいづ

れか一方に必ず主観的叙述を見るのである。

(6) いづくにか　ふなはてすらむ　安礼の崎　こぎたみゆきし
たななしをぶね（巻一―五八）

今行きて　きくものにもが、明日香河　春雨ふりて　激つ瀬の音
を
（巻十一―一八七八）

朝床に　きけばはるけし、射水河　朝こぎしつつ　唱ふ船人
（巻十九―四一五〇）

かうして見れば、(6)の黒人の歌は、二十例の如き表現方法の中でも極めて異色あるものであり、万葉全短歌中でも、特異なるものであるといへよう。しかも、この三句目の地名「安礼の崎」は、「明日香河」「射水河」の場合と異なり、一首全体の構造に於いて遙かに緊密なる有機的な参与をなし、主題の心情の表出を全からしめる地名の生かされ方をなしてゐるのである。

即ち、この(6)の歌の初二句、「いづくにか　ふなはてすらむ」（5・4・3音）は、黒人の前述(1)から(5)までの歌の場合と同じく、主観の表出を以つてし、世にいはれる如く旅愁寂寥の詠歎を打ち出してゐるが、その表出を省察してみると、疑問に始まる初句の強い詠歎は、二句目の終りに緊密に応じ合ひ、あてのない船の行方を追ひ求める意味の進みゆきは、5・4・3音と遠くすぼまりゆく律動と重なりあつて、作者の心情は〃行く船〃と共在共鳴し、船の漂泊即わが心情の漂泊として、打ち出される。しかもこの詠歎のひそまるところ、二句目の4・3音による表出は、漂泊の心情をして精神の内奥にこもらしめゆきながら、この彷徨の、具体を求めてやまぬ弾力を孕ませてゐる。俗語を使ふならばばねが仕かけられてゐるといつてもよく、この休止ほど構造的効果を持つたものも少ない。この休止をついで、躍るやうに明確な主舞台「安礼の崎」が提示され、心情は具体に宿りゆくこととなる。第三句が地名のみの明確な表出であることが、「安礼の崎」への心情の躍動を感じさせ、主観の彷徨を見事定着せしめると同時に、初二句をして、考察せる如き表現たらしめてゐるのである。

いづくにか　舟乗しけむ、高島の　香取の浦ゆ　漕ぎ出来る船
（巻七―一一七二）

の如く、初二句に類似の表現のものはあつても、極端にいへばこれとは生死の違ひがあるといつてもよい程の躍動した表現たらしめてゐる所以である。のみならず、この「安礼の崎」とのみ置かれた処にこそ四・五句の表現に確とした舞台を与へ、いはば四・五句の実景を精神の額ぶちにおさめ得る役割を果してゐるのである。尚、私はこの「安礼」に「荒れ」を感じるのだが、主観に走るので、感じるといふだけに止めておきたい。（尚、この事は石坂正蔵氏も創元社万葉集講座第一巻鑑賞篇に「荒れか生れか知らないが」と述べて居られる。）

さて、かうした「安礼の崎」の置かれ方は、四・五句の「こぎたみゆきし（4・3音）たななしをぶね（4・3音）」の微細描写を、安礼の崎の海上にぽつんと置かれた一点として収約してしまふ。殊に結句を体言で止めたことは、三句目を地名のみで置いた事に緊密に呼応し、「安礼の崎」海上の主舞台の中にきつちりと収めこめられる。船は今、4・3・4・3の音の、内にひそまりゆく律動にのつて、恰も揺れるやうに漂々と小さくなりゆく一点として打ち出される。しかも、これは実景であると共に、「こぎたみゆきし」の「し」によつて、今は作者の網膜に残る忘れえぬ景であつて、漂々の船の

姿は実は漂々の作者の心の姿であり、ぽつんと置かれた一点は漂ふ作者の心の在りどころを示す一焦点となつて、見事に初二句の主観にうち返る心情表出の構造である。四句目の処は4・3音であると共に、更に律動の内面に刻み込んで見れば「こぎ・たみ・ゆき・し」の2・2・2・1音でもあつて、恰もこきざみに水脈の波紋を遺して進みゆく船の姿でもあり、心のこきざみにたたみこまれ漂ひゆく姿でもある。その上、「あれのさき(i)こぎ(i)たみ(i)ゆき(i)し(i)たなし(i)をふね」に見るiの韻の連続は、船の小なる一点となつてこがれゆく律動に拍車をかけるのみならず、寂しくひそまりゆく作者の心情をあとづけてゆくかの如き律動でもある。もちろん、かうした事のすべてが、作者の意識によるものではないが、黒人美の構造の一つの在り方をここに見出し得るのである。

かくて、この第三句目の地名「安礼の崎」の生かされ方は、黒人の他の例とも異なり、集中の他の十九例の場合とも異なり、一首の死活をも握つた有機的な構造に於ける地名表現をなすものと言ふべきである。

五

初二句に地名を含まず、且二句目に休止なくして、三句目に地名の出て来るものに、黒人には、

(7) あともひて　こぎゆくふねは　高島の　足速のみなとに　はてにけむかも　（巻九―一七一八）

がある。これは歌の中間に休止のないものであるが、叙述面には休止はなくとも、これとても、声調上からは二句目の終りに軽い小休止の考へられるものである。

この(7)の歌の場合の初二句は、作者の位置とはすれ違つて引連れ立つて榜いでゆく船を主格に提示したものであるが、描かれだ叙述の上でも、5・4・3音による形成の上でも、主格は、去りゆく一つの方向に次第にこきざみに焦点化されて居り、同時にそれは作者が、進みさりゆく船によせる共鳴りの心情の表出でもあつて、その事が逆に、事実上あとにのこる作者の寂寥感をも表出してそれを結句へと発展せしめる響きを持つものである。

第三句目「高島の」の地名の表出は、かかる二句までひとくぎりの表出、殊に二句目の4・3音の律動にひそむ弾力を受けて、これまた躍るやうに、琵琶湖上彼方の大地名を登場せしめ、縹渺たる湖上、具体的空間的ひろがりへの発展の契機を与へしめるものである。かくて四句目の「安速のみなと」（滋賀県高島郡安曇川の河口）にうけつがれて、の音による大地名より小地名への連接発展の表出は、船の進行の方向を焦点化して、湖上大景の中の遙かなる一点に向つて営まれゆく旅する船の進展を示すと共に、作者の船のあとを追ふ心情の流動と、空虚な夕景の湖面にのこる旅のやるせなさ、たよりなさ、郷愁感の発展を、背後にひそませて、結句「はてにけむかも」（3・4音）にその詠歎の表出を見るである。殊に結句の3・4音は四句目の3・4音と応じて、作者の心情はこの律動にのつてはるかに発展してゆき、二句目の「こぎゆくふねは」の強い提示は、「榜ぎゆく」→「泊つ」の呼応のみらず、この律動によつて確と受けとめられてゐる。歌中の地名が単に土地を指示するものではなくて、一首の死活に及ぼす表現の問題になつてゐることの、いかに大きいかを知るのである。殊に黒人の場合、然りである。尚、田辺幸雄氏がいはれる如く（「高市黒人」）、「あともひて」と「あとのみな

と」とのあとの同語反復の効果ももちろん考へられる。この「あとも ひて」の「あと」を田辺氏が地名阿渡と見る説（解釈と鑑賞昭和十六年二月号高市黒人の歌二首に就いて）を試みて居られるが、いかゞであらうか。

万葉集短歌中、初二句に地名なく、二句目の終りに助詞「は」を置いて、三句目に地名の置かれる歌は、黒人のこの歌の外に、次の五例がある。「すは」の三例（巻十一・二七四三及或本巻十二・三二〇五）の場合は性質が異なるから除外する。

朝びらき　こぎ出て我は　湯羅の崎　釣する海人を　見てかへり来む（巻九―一六七〇）

今日今日と　わが待つ君は　石川の　貝に交りて　在りといはずやも（巻二―二二四）

うち日さす　宮の我背は　大和女の　膝枕く毎に　吾を忘らすな（巻十四―三四五七）

沖つ鳥　鴨とふ船は　也良の崎　たみて榜ぎ来と　聞え来ぬかも（巻十六―三八六七）

我が面の　忘れむ時は　筑波嶺を　ふりさけ見つつ　妹はしぬばね（巻二十―四三六七）

右いづれも第三句目に地名一箇を存するものであつて、「也良の崎」を初め、それぞれ地名表現の特色は持つてゐるが、黒人の場合の如く三・四句に地名を駆使して、緊密な心情表出の構造の中に置かしめてゐる例は異色といふべきである。

尚、佐々木博士は黒人のこの歌について、「さ夜深けて夜中の潟におぼほしく呼びし舟人泊てにけむかも」（巻七―一二二五古歌集）の影響が認められるといはれ（「高市黒人」）、武田博士は巻一・五八（「いづくにか船泊すらむ…」）と同様な手段といはれる（「全註釈」）が、歌意の上から一見類想のものに見えても、歌としての心情表現の構造の上からは全く別種のものであつて、まして地名の生かされ方は、黒人独特の一つの個性的特色を示すものである。

尚、黒人の歌十八首中に唯一の地名を含まぬ歌として、

(8) たびにして　ものこほしきに　山下の　あけのそほぶね　おきにこぐみゆ（巻三―二七〇）

の一首がある。この「山下」は旧訓「ヤマモトノ」であつたのを、宣長が玉の小琴で「ヤマシタノ」とよんで、枕詞と見、詳しい説を挙げて以後、枕詞の語義には諸説あつても、今日までの註釈書の多くはこれを枕詞と見てゐる。一方古く仙覚抄は「山もとはところの名也、筑後の国にあるにや。」と地名説を立て、童蒙抄またこれを地名として居り、また古く契沖は実景と見、今日実景と見るものに山田博士の講義や、川田順・尾山篤二郎・田辺幸雄・窪田空穂等の諸氏がある。私は、黒人の実につく個性からも、第三句目の多くの在り方からも枕詞と見るべきでなく、巻三・二八〇の「白菅の」の如きも、実景でこれこそあれ、枕詞と見るべきでないと思つてゐる。その点、古昔の地名説は黒人作品の本質を看取つたかの如き説であるが、今俄に地名とも断じ難しとすれば、(7)の歌まで考察した第三句目の地名表現の在り方から帰納して、少くも場所を示す言葉であるべく、稿を改めて論ずべきではあるが、今の処、実景説を以つて最も妥当なるものと思ふのである。従つて、ここには考察の対象として挙げないが、上述の地名表現に似通ふ表出がなされてゐるのを見るのである。

六

短歌一首の中に地名二箇（時には三個）を入れて、地理的に互ひに映発関係を醸し、それに拠つて心情の表出をはかるものは、万葉集中に相当に多いが、これを一つの地名が第三句目にあり、一方が初二句にあるものに限定すれば、三十九例となる。これを更に、二句目に句切のあるものに限れば十九例を数へる。

湯羅の崎　汐干にけらし。白神の　磯の浦廻を　敢へてこぎ動む
（巻九―一六七一）

年魚市潟（あゆち）　汐干にけらし。知多の浦に　朝こぐ船も　沖に寄る見ゆ
（巻七―一一六三）

可之布江に　鶴きわたる。志珂の浦に　沖つ白浪　立ちし来らしも
（巻十五―三六五四）

の如きである。この場合、わづかの例外を除いて、初二句が主観的表現であれば三句以下では客観的表現であり、或はまたこの逆であるのが一般で、且初二句の地名は一例（巻一―五五）を除いて、全部第一句目に地名がある。黒人の

(9)　桜田へ　たづなきわたる　年魚市潟（あゆちがた）　しほひにけらし　たづなきわたる
（巻三―二七一）

の歌の場合もそれである。

(9)の歌は初二句に客観的表現をなすもので、初句冒頭、鳴き渡る鶴に明確な方向を与へて、二句目に小さく移動しゆく鶴の実景をとらへる。二句目の休止と、5・4・3音の律動とによつて、作者の網膜にうつる鶴群は遠ざかりゆく方向に於いて明確にとらへられ、それを放心に見つめ見送りゆく心情を表出して、次への空間的ひろがりと心情の展開への弾力を孕んで、一応くつきりと完結せしめる。（「たづなきわたる」は叙述の上では2・5音であるが、声調の上からは、黒人の他の例からも思ひあはせて、4・3音と見るべきであらう。これは次の「しほひにけらし」の場合も同様である。）

この弾力をついで出た第三句目は地名のみの「年魚市潟」として置かれ、この事は直ちに「桜田」との地理的映発関係を醸して空間的ひろがりを獲得すると共に、思ひ馳せられた土地として心情の遙けきひろがりをも獲得せしめる。「桜田」「年魚市潟」のきれいな新鮮な地名の効果もそれを助長せしめる。干潟に下りる鶴群への想像は、かくて、四句目「しほひにけらし」の伸びやかな主観として展開する。（尚、年魚市潟の潮干を離れて鶴が来ると見る山田博士講義の説その他間々見るこの類の説は、鶴の習性に遠いものといはねばならない。）しかもこの場合も5・4・3音の在り方は、四・五句の心情の発展をくつきりと一応完結せしめ、且初二句に応じて快き諧調を醸さしめ、初二句の場合と共に動の景情を恰も額ぶちに収める如く静止の姿に把へしめる。そこから透徹した明るさ・鮮明さが生まれ、一つの黒人の世界が形成されるのである。

二句目の場合と同じく、四句目にひそめられた弾力は、この諧調に乗つて、第二の休止を破り、弾み来る心情の躍動となつて、結句の「たづなきわたる」の景観に奔出し来る。いはれる如く二句目の反復として音楽的諧調もさることながら、単なる景観の繰り返しではなくて、景情合致の心情の奔出として把へられ、しかもこれまたくつきりとした額ぶちに収めきる如き声調の清潔さこそ、黒人のものでなければならぬ。

二句・五句の繰り返しは、これも世にいはるる如く口誦の遺風で

あり、集中に多く数へ得るが、その遺風を取り来つて黒人の場合の如き表現的効果を挙げてゐるものは稀である。殊にこの歌の如く、第三句目に地名を置き、初二句にそれと映発関係の地名があつて、二句切となる表現をなすもの、前述の十九例の中で、二句五句の繰り返しを見るのは黒人のみである。他は三句以下を概ね一途に主観又は客観に方向づけるのみで、黒人の場合の如く、一見単純に見えて複雑な構造的関聯に置かしめ、表現的効果を挙げてゐるものはない。

同じく、第三句目の地名と、初二句のいづれか一方の地名とが、互ひに地理的映発関係を保つ集中の三十九例を、前述の如き明確な二句切にならずに、二句目の終りに助詞「ば」を伴つたもののみに限定すれば、左の六例になる。

(10) 四極山(しはつやま) うちこえみれば 笠縫(かさぬひ)の 島こぎかくる たななし をぶね (巻三—二七二)

相坂を うち出て見れば 淡海の海 白木綿花に 浪立ちわたる (巻十三—三二三八)

しなが鳥 猪名野を来れば 有馬山 夕霧立ちぬ 宿はなくして (巻七—一二四〇)

大坂を わが越え来れば 二上に 黄葉流る 時雨ふりつつ (巻十—二一八五)

之乎路(しをぢ)から 直超え来れば 羽咋(はくひ)の海 朝なぎしたり 船楫もがも (巻十八—四〇二五)

焼津辺に 吾が行きしかば 駿河なる 阿倍の市道に 逢ひし児らはも (巻三—二八四)

右の六例を見ると、二句目は句切にはならないが、三句目との間に声調上いづれも小休止の考へられるものであり、初二句は、六例とも作者の行動を叙して居つて、最後の例を除いては、いづれも、初二句は5・4・3音の律動をなしてゐる。

黒人の(10)の歌の場合、冒頭に四極山の地名のみが置かれて、土地の名によせる旅心の新しい感動とわが居点が鮮明され、そこに立つて展望する心は、俄然第三句目の地名に定着点を得て、見る位置と見られるものとは互ひに新鮮明確な映発関係によつて空間的ひろがりを獲得し、そのひろがりの中に、移行し去りゆく一点としての小舟の微細化描写を可能にする。眺められた第三句目の地名を舞台に微細に移動的に描かれた一点小舟の行方は、初二句に映発されて一齣の鮮明透徹な景観となると共に、それはまた漂泊追求の作者の心持のあとづけられてゆく姿でもあつて、網膜に消えない佗びしい一点となつて残る。第三句目が「笠縫の」であることが景観と感動をスムースに結句までひきのばし、結句が名詞止であること、三・四句の5・4・3音が初二句の5・4・3音に対応し、四・五句がまた4・3・4・3音の諧調であること、これらの緊密な構造的関聯によつて、景観ははなやがず、主情は内にひそまつて、作者の心のありどころを清潔鮮明に表出せしめるものとなつてゐる。

これを前の六例の中の他の五例に較べて見れば、五例は夫々に境地が詠出されてゐるけれども、「しなが鳥…」の歌などは暫く措き、いづれも多く浅々とした所を免れない。第一句と第三句に地名を置く表出法などは、地名表現への意識乃至直観の鋭さがない限り、偶然的な地名の配置に終る恐れがある。黒人がここに二つの地名を駆使して、心情表現の構造的な関聯の中におき、黒人美の一つの特異な世界を形成してゐることは、注目されなければならない。

尙、「笠縫」の地名には笠縫部のいとなみといふものが、何らか感じられて、一つの効果を挙げてゐる点があるかも知れぬ。

右の黒人の(10)の歌を含めたこの六例の外に、

(11) 磯の崎　こぎたみゆけば　近江の海　八十の湊に　たづさはになく

（巻三―二七三）

の歌の「磯の崎」「八十の湊」は地名ではないが、夫々、状態を持つた場所を表はす点で、表現の上の役割に於いては、地名表現の場合に似通つた効果を持つて居り、その点で、第一句目の「磯の崎」と、三・四句の「近江の海」「八十の湊」は互ひに映発関係に置かれ、(10)の場合と通ふ表現をなしてゐると見られる。「磯の崎」は原文「磯前」で、これを滋賀県坂田郡磯前神社附近にあて（略解、金子氏「評釈」等）、また「八十の湊」を同じく犬上郡八坂村にあてる説（檜嬬手」等）があるが、これは敢へて地名に求むべきではなく、湖水の中の「磯（石）の多い岬」「あちこちの多くの湊（河口など）」の意に見るべきであらう。

この(11)の歌で、地名のみで第三句目が据ゑられ、「近江の海」と置かれたこの表現は、一首の構造的関聯に於いて全景観全心情を統べて、この表出を全からしめる極めて重要なる生かされ方にあるものである。

即ち、初二句の、磯の崎をこぎめぐりゆく自己の行動の移動過程の叙述のあとを受けて、突如広大な地形のひらけきたつた効果、即ち移動風景的場面転換の鮮かさと、その移動展開による感動の心情の躍出する感を、鮮明にあらはしてゐる。それはこまかに見れば、初句が、近江の湖水の中であつても「近江の海」といふことが意識にのぼらない程の湖中の一場面「磯の崎」とのみ置かれて、次に二句目の行動の叙述を経て、湖上全面を見渡す如き「近江の海」に相対し、互ひに地形的映発関係によつて、空間的ひろがりを獲得し、それによつて開豁な大景の突如ひらけきたつた驚きの感をあらはすもので、今や、湖岸の一地形に沿うてとりとめもなく密着しつつゆく作者の心情は、静かな移行の果に、意外の見事な定着地を得た感である。

それには、初句の「磯の崎」と三句目の「近江の海」との、磯から近江へ、崎から海への変化、及び中間の の音の呼応から来る諧調、また初二句の5・4・3音の律動から来る景と行動叙述の上に見るせまりゆく感じ、及び二句目の終りの小休止、さらに、「イソノサキ、コギタミユケバ、アフミノミ」に見る次々にi韻によりおくられる諧調等が、大いなる助けをなしてゐる。

かかる緊密なる関聯に於いて、第三句目は初二句に対し、有機的表現構造を全うしてゐる。

かくて、第三句目は、空間的ひろがりに於いて、また心情的ひろがりに於いて、四・五句の景観及び心情展開に対して一つのしつかりした舞台を与へるものとなる。しかも、地名だけの名詞で止めてあることが、そこにかすかな休止を与へて、四・五句の表出を躍動せしめる。

即ち、四・五句に於いては、与えられた広大静閑な湖面の舞台に於ける、各処展望としての「八十の湊」の微細且動的景観が、静中、澄みのぼる白鶴の声のみとして描かれ、そこに心情は、景観に沿うて静澄透徹なるものに発展し、一種の黒人的郷愁の世界を実現する。

この場合も「八十の湊」のの音が、「磯の崎」「近江の海」のの音

に呼応して景情の伸展を助け、「ヤソノミナトニ、タヅサハニナク」のｉ韻は、上三句のｉ韻に呼応して、快調をもたらすのみならず、一入澄みとほる感を助ける。且、結句の「たづさはになく」は、叙述の上からは「鶴が・多に鳴く」であるが、表現面からは「鶴多に・鳴く」に近く、白鶴はあちこちに沢山ゐて、盛に鳴いてゐる趣で、従つて声調も四・五句は３４・５（２３）２音とよみとつて初めて、景観は鮮明清潔に刻みこめられ、その餘韻の中に、作者の心情は投影されるに至るのである。鶴の鳴くのは、この表現の上では「船の出入がある為に、警め合つて鳴く場合を心に置いたもの」（窪田氏「評釈」）といふやうな理智のはいつたものではない。

かくて、(9)(10)(11)三歌に見る、映発関係に於ける第三句目の地名表現が、一首の心情表出の構造的関聯に於いて、一首の死活を握る極めて重要なる役割を果して居り、そこに作者の意識すると否とに拘らず、黒人美の構築の鍵があり、それ〴〵に全き生かされ方をなしてゐるのを知るのである。

七

黒人の歌の中には、他にもう一つ第三句目の地名表現に於いて、既述のものとも異なり、且、集中に類例を見ない独自の表現をなす次の歌がある。

(12) わぎもこに　猪名野はみせつ　名次山（なさやま）　角の松原　いつかしめさむ　（巻三―二七九）

万葉集中の短歌で、第三句第四句に地名の置かれたものは四十一例を数へ、その中、初二句のいづれかにも地名を伴ふものは七例である。この四十一例の中、

（イ）吾妹子に　猪名野は見せつ　名次山　角の松原　いつか示さむ　（巻三―二七九）

（ロ）思ひつつ　来れど来かねて　水尾が崎　真長の浦を　またかへり見つ　（巻九―一七三三）

（ハ）藻刈舟　沖こぎ来らし　妹が島　形見の浦に　鶴翔る見ゆ　（巻七―一一九九）

（ニ）苦しくも　降り来る雨か　神の崎　狭野の渡に　家もあらなくに　（巻三―二六五）

（ホ）吾妹子や　吾を忘らすな　石上　袖布留河の　絶えむと念へや　（巻十二―三〇一三）

（ヘ）音にきき　目にはいまだ見ぬ　吉野河　六田の淀を　今日見つるかも　（巻七―一一〇五）

の外は、三・四句の地名は主として助詞「の」によつて連接するか、稀に「なる」によつて連接するもの（五例）であつて、それによつていづれも大地名より小地名への連接をなすものである。右に挙げた歌の中、（ホ）の歌の「石上・袖布留河」及び（ヘ）の歌の「吉野河・六田の淀」は「の」又は「なる」を伴はずに地名で続けられてゐるが、これは明かに「石上の布留河」「吉野河の六田の淀」即ち大地名小地名の関係に於いて置かれてゐるものである。また（ロ）の「水尾が崎・真長の浦」、（ハ）の「妹が島・形見の浦」、（ニ）の「神の崎・狭野の渡」は大小の関係に於いても見られ、並列の地名とも見られる。これを大小の関係とすれば、黒人の(12)（イ）の歌の三・四句は完全並列であるから四十一例中の全く独自のものとなる。これを並列と見ても、「水尾が崎」は滋賀県滋賀郡の北端の明神崎で、その北側に続く海岸が「真長の浦」であり、「妹が島」「形見の

浦」は所在定め難いが、妹が島をかりに紀州友が島とし後者を加太の浦としても、鶴翔るを見得る海景一視野の中に収まるものであり、「神の崎・狭野の渡」は、近時土屋氏が泉佐野（大阪府）に求められるが（私注）、通説の如く、新宮市に求めれば、これまた海岸の景一視野の中の連接地であつて、名次山（西宮市名次町の丘陵。丘陵の北端に式内名次神社がある。）と角の松原（西宮市津門の附近か。所在定め難しとしても名次山の南方にはまだ別の小丘があつて、すぐ附近には松原を想定し難い。）とが距離があり、山と松原との別種のものであり、その上、地名だけで置かれた完全並列の場合とは較ぶべくもない。まして、三・四句の地名のみならず初二句の中にも地名を含むもの七例の中では、並列は黒人の歌だけであることを思へば、これは類例のない独自のものといへる。ここに於て、地名表現に集中特異の表出がなされてゐるのを見るのである。

この(12)の歌の第三句目の「名次山」は、四句目の「角の松原」二句目の「猪名野」と共に、一首の心情表出の上に於いて、極めて緊密な構造的関聯に置かれてゐる。まづ、二句目の「猪名野」は、景勝の地として或は少くも作者の愛と憧憬の注がれた地、妻との共感の持ちたくなる地として表出されてゐる。それは、「吾妹子に」を初句に持つてゆく事によつて、散文化がふせがれて強調されて居り、助詞「は」を伴ふことによつて、主題の地は明確化され、黒人が初二句に度々用ゐる5・4・3音による段々と迫つて焦点化しゆく律動の助けを得て、「見せつ」が躍動し来り、そこに猪名野によせるさうした心情と、それのやつと充たされた満足感が奔出し来るのを見る。初二句のこの表出法に加ふるに、助動詞「つ」の持つ切りつまつた感は、句切による休止の前に、心情の下句にはねかへる弾力を蓄へしめ、そこに第三句の地名のみの表出が、猪名野に対するのと同一心情の地として明確に躍り出る感を与へられる。つゞいて並列された「角の松原」（3・4音）も同一心情の上に、3・4音と「の」による連接によつて更に発展化され、しかも地名のみでとどめられることによつて詠歎が出て来る。この二地名のみによる配列は、二句目の地名と応じ合つて、互ひに映発的効果を得て空間的ひろがりを獲得すると共に、次々と点在的なひろがり、道行的景観を獲得し、そこにそれらの地と妻によせる愛情はなひあはされて高められるに至る。にもかかはらず、それの充たされぬ結句の歎きは、四句目の小休止をついでいつまでも心残りの歎息へとおひこむ。その上、憧憬と歎きは四・五句の3 4・3 4音の律動にのつて、あとに揺曳する。「早く見せたい」（鴻巣氏・佐佐木博士）「いつ見せようか」（佐佐木博士・土屋氏）にはちがひないが、この表現の在り方では見せられない歎きが主であつて、そこに、通説の如く妻を伴つた場合でなく、この場合、尾山氏等のいはれる如く（「高市黒人」）、妻は家郷にありと見られるのである。

多くいはれる如く、「吾が欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ」（巻一―一二）と、初二句は類想に近いが、地名表現に於いては全く異質のものであつて、地名三個をかくも大胆卒直に配し、かやうな構造的関聯に置かしめて、土地と妻への清純淡白な愛の心情を表出せしめるところ、地名への関心度、集中無類に近い彼にして初めてなし得る処である。特に第三句目の地名が、第二句を受け、四・五句を発展せしめるこの表現構造の呼吸は、まことに瞠目すべきものがある。

八

黒人の歌で第三句目に地名の置かれたものは、以上の(1)から(12)までの歌のうち(8)を除いた十一首であるが、ここに第三句目の地名表現に於いて、黒人以外の集中の短歌には多く見られて、黒人にはない表現をなすものがある。それは、第三句目の地名が、地名のみで置かれる場合又は下に助詞等を伴ふ場合を問はず、ともかくも第三句目に地名が置かれて、その上の初二句が三句目の地名への何等かの形容修飾をなしてゆく表現をなすものである。たとへば

往きて見て　来れば恋はしき　朝香潟　山越しに置きて　宿ねがてぬかも　（巻十一―二六九八）

子等が手に　かけのよろしき　朝妻の　片山ぎしに　霞たなびく　（巻十一―一八一八）

朝霞　やまず棚引く　龍田山　船出せむ日は　吾恋ひむかも　（巻七―一一八一）

の如きで、集中六十七例を数へ、その中で比較すれば、三句目に地名のみを置く場合がより多く、二句目が3・4音の律動となつて地名へとせりあげてゆく呼吸のものが中葉を越えて（三十六例）多い。この六十七例は、巻七・巻十二・巻十一・巻十等作者未詳の巻、及び遣新羅使人一行の歌で既に三十五例に達し、他は個々散在の形である。

この表現をなすものが、かくも地名の多い黒人の歌に一首もないことは、黒人の第三句目地名表現に於ける一つの大きな特徴であつて、彼の心情表現の一つの特異性をみとり得るのである。即ち、形容修飾を伴ふことによつて地名そのものが、平板化し独立性を失ひがちになり表現力を他に依存せしめることを避けて、第三句目の地名そのものを心情表現の構造的関聯の中軸におかしめて、地名そのものの置かれ方による表現力を発揮せしめ、もつて心情の躍動展開をはかる彼の心の在りどころを示すものである。

地名は彼にとつて偶然瞩目の一地点一佳景ではなく、彼の魂の宿り場であり、憩ひ場であり、躍り場でさへある。郷愁に近い一種のエクゾチズムがそれによせられてゐるといつてもよい。それが全十八首中二十九箇の地名を詠出せしめる所以でもあり、短歌表現に於けるかなめともいふべき第三句目にかくも多数の地名を置かしめる所以でもあらう。のみならず、その三句目の地名は、上に形容修飾を伴はないことによつて、却つて躍り出るやうな新鮮さをもつて、多く揺動する魂を定着せしめ、そこを通して、そこに密着してさらに、心情の律動は表出されゆくのである。彼の第三句目に地名のある歌が、全部二句目に句切があるか、或は声調上の小休止が考へられ、しかも以上の考察に見るごとく最も効果的な措置のとられてゐるところこそ、三句目の地名表現を全うせしめる契機となるものである。

黒人の地名表現全般については、また別の機会に述べたいと思ふが、ここには彼の地名表現中最も根幹をなす第三句目の地名表現について以上考察を加へた。彼の意識すると否とを問はず、彼の第三句目の地名が、一首の心情表出に於いて、極めて緊要且特異なる構造的関聯に於いて生かされて居り、且つその生かされ方が、集中類を絶してゐる所以を明かにし得たと思ふ。黒人の心情、黒人の個性は作品構成のこの構造の在り方に看取り得る。尚、実地の風土との関聯に於いては煩雑を避けて考察に加へなかつたが、これはさらに追求されなければならない。（了）

―大阪大学助教授―